ている。枝肉価格は現在がピークにきており、来年はどう相場が変わるか不安もある」と語った。

畑作　ＪＡ、個人で出来に差

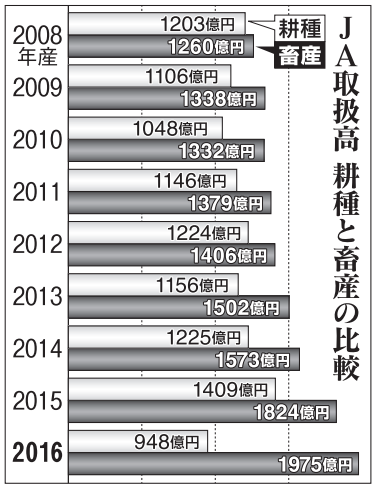
畑作農家で全十勝地区農民連盟の西原正行委員長（上士幌）は、「十勝全体としては良い結果だが、ＪＡや個人によって差が大きいと聞いている。畑作では多くが（台風や長雨の）影響を受けていて、畑の土が流された人は今後を心配している」とし、結果の受け止めはさまざまだと指摘。「全体的に良くて体力がある年こそ、次に向けた基盤づくりや対策を進めてほしい」と求めた。

管内東部の中堅酪農家は「確かに今年は生乳販売の収入は若干良くて、子牛価格は上がっている」と指摘する。

ただ、現在は自給飼料の質低下の不安要素が先に立つと言い、「酪農家は搾乳で収入を伸ばしたいが、来年は乳量や牛の病気が心配で素直に喜べない」と語った。

農業ガイド1089号　2016年12月24日
ＪＡ取扱高　畜産2000億円目前　不作の畑作の２倍

2016年産農畜産物の十勝管内ＪＡ取扱高（概算）では、畜産部門の好調ぶりが目立った。不作だった耕種（畑作）の２倍に達し、全体の落ち込みをカバーした。規模拡大に加え、この１、２年は個体販売の価格高騰があり、取扱高はこの８年で５割増えた。



耕種の取扱高がその年の天候に左右される一方、酪農と肉用牛の畜産は設備投資や増頭で堅調に推移している。現在の統計方式になった08年の1260億円が、16年は1975億円と大台の2000億円に迫る勢い。伸び率は15年が前年比16％増、16年はさらに８％増えた。

酪農は、生乳生産量が前年を上回ったことと、子牛などの価格が上昇して前年比６％増の1212億円。肉用牛は枝肉価格や素牛（もとうし）取引価格が堅調に推移したことから同14％増の721億円だった。

牛肉の枝肉価格（Ａ５ランク）は今年の９月までの平均がキロ当たり2835円で、３年前に比べて33％上昇。乳用の初任牛の価格が10月までの平均単価は67万7000円で、この３年で37％も上がった。ホクレン帯広支所の猪股透所長は「家畜生体も枝肉も価格が相当高騰した。乳価も上がっており畜産の金額を大きく伸ばした。高騰は頭数減少による需給関係が原因。当分続くのではないか」としている。

耕種と畜産の取扱高の差は、08年の57億円から徐々に広がってきて、耕種、畜産ともに好調だった15年は415億円に。16年は耕種が台風と長雨で過去最低、畜産が過去最高だったこともあって２倍に広がった。

梶田敏博十勝総合振興局長は「畜産は施設整備、頭数、家畜改良が進み、家畜の能力が上がった。潜在的に生み出す価値は大きくなっている。えさや農家の飼養管理の技術が組み合わさり、ベストパフォーマンスを発揮している」と話している。

共済支払い　小麦115億円過去最大　天候不順影響　2016年12月26日

十勝農業共済組合（十勝ＮＯＳＡＩ、岡田恒博組合長）は、2016年産の小麦や畑作物（豆類やジャガイモ、ビートなど）の共済金で、年内支払い分の金額を決めた。総額は189億4071万円、うち小麦は115億2347万円となり、同組合が現在の組織となった1999年以降で最大。天候不順や台風による記録的な不作を受け、農家に支払われる共済金も大きく増えた。

畑作年内合計　１８９億円

同組合は年内に小麦と豆類を支払い、ジャガイモやタマネギは「仮渡し」として一部を支払っている。ビートやスイートコーンなど４品目は例年は１～２月が支払い時期だが、今年は農家の経営状況を考えて初めて年内に仮渡しする措置を取った。22日に各農家に支払った。

小麦は開花期の天候不順などで収量、質ともに平年を大きく下回った。共済引き受け農家3325戸のうち、管内東北部の一部農家を除いた3031戸が支払い対象となった。引き受け共済金に対する支払額（金額被害率）は38.7％に達した。115億円の支払額は合併前を含めても